

前置と主語（助）動詞倒置

時崎 久夫

1. はじめに

構成素の前置に主語（助）動詞倒置が伴う構文には、wh 疑問文や場所句倒置文などがある。従来の生成文法的研究では、統語部門の主要部移動で助動詞や動詞を統語的に主語の前に移動し、さらにその前に wh 句や場所句などの構成素を移動することによって、これらの構文の語順を派生していた。

しかしながら、ミニマリスト・プログラムでは、語順は構造の外在化の際に決定されると考え、主要部移動の存在も疑問視している。小論では、倒置語順は、内的（または外的）併合によるものではなく、構造が外在化する際に、強弱のリズムによって選択されるということを論じる。

2. 前置と主語（助）動詞倒置が起こる構文

前置と主語（助）動詞倒置が起こる構文には、次のようなものがある。

(1) Preposing + SAI

- a. Wh- question: *What does she tell you?*
- b. Negative preposing: *Not one of them did he find useful.*

(2) Preposing + SVI

- a. Directional Adverb: *Here comes my brother.*
- b. Quotative Inversion: *"Ooh," squeaks Minnie.*

(3) Preposing + SVcI [V complex] (Preposing Around Be)

- a. Comparative: *More important has been the establishment of legal services*
- b. Participle: *Speaking at today's lunch will be our local congressman.*
- c. PP: *In each hallway has long stood a large poster of Lenin.*

3. 統語・音韻部門での主要部移動

生成文法では従来、主語（助）動詞倒置を（助）動詞が主語を越えて移動する主要部移動として扱ってきた。(4)の疑問文では、一般に、助動詞 *can* が主語の *the girl* を越えて C に付加すると考えられている。

- (4) a. $[_{CP} [_{C} [_{T} \text{Can}] C] [_{TP} \text{the girl } [_{T'} \text{can swim in the sea}]]]?$
b. $[_{CP} \text{What } [_{C'} [_{C} [_{T} \text{can}] C] [_{TP} \text{the boy } [_{T'} \text{can cook what by himself}]]]]]?$

しかしながら、Chomsky (1995, et seq) は、この移動が Extension Condition を満たさず、counter-cyclic であり、移動先が移動元の位置（斜字体で示す）を c-command しない、そして移動に意味的な効果が見られないことから、主要部移動は、統語部門ではなく、音韻部門（PF）の移動と考えている。

しかし、主語（助）動詞倒置を PF での主要部移動とすると、倒置が構造に依存するという事実に合わない。まず、主語と倒置される助動詞は、構造的に主語の姉妹である述部の助動詞でなければならない。

- (5) a. $[_{I_S} [\text{the man who is talking}] \text{ is sane}]?$
b. $*[_{I_S} [\text{the man who is talking}] \text{ is sane}]?$

また、助動詞が2つ以上連続する場合は、構造的に最上位の助動詞が倒置しなければならない。

- (6) a. *What should the girl *should* have done?*
b. $*\text{What } \underline{\text{have}} \text{ the girls } \text{should } \text{have done?}$

外在化された後の音韻部門では統語構造のような階層構造はないと考えられるので、PF で移動すべき助動詞をどうやって正しく選ぶことができるのか不明である。

4. 主語（助）動詞倒置の外在化

主要部と補部の語順については、従来主要部パラメータで扱われてきたが、Tokizaki (2018) などで、順序のない集合を各言語の音韻（強勢など）に従って線形化することを提案してきた。この場合は主要部と補部が構造上姉妹関係にあるため、モビールを回転させるように主要部と補部の順序を決定することができる。

- (7) a. $\{X, YP\}$
b. $[X YP] \text{ or } [YP X]$

しかし、主語と（助）動詞は姉妹関係ではないため、そのままでは倒置させることができない。時崎 (2021) では、（助）動詞 I の補部にあたる VP を音韻部門（PF）に転送（Transfer）した後に主語と I' が回転

することにより主語（助）動詞倒置の語順が外在化する、と論じた。(4a)の例を示すが(4b)も同様である。

- (8) a. {Subj, {T T VP}} > Transfer: VP {{the girl} {{can {swim in the sea}}}}
 b. {Subj, {T T VP}} (PF: VP) {{the girl} {{can {swim in the sea}}} (PF: swim in the sea)
 c. [[T T VP] Subj] (PF: T Subj VP) [can [swim in the sea]] [the girl]] (PF: can the girl swim in the sea)

この姉妹回転(Sister Rotation)により、(2)の主語・動詞倒置も導き出すことができる。(2a)の場合を示す。

- (9) a. {{my brother} {comes, here}} > Internal Merge: *here*
 b. {here {{my brother} {comes, here}}} > Externalization
 c. here [[comes *here*] [my brother]]] (PF: Here comes my brother.)

(9a)の基本構造から *here* が文頭に移動して(9b)が作られるが、外在化する際に *my brother* と *comes* の強勢が問題となる。強勢は、端末(terminal)の *comes* ではなく、集合(set)である *my brother* に置かれる。よって(Here) comes my brother という弱強の強勢パターン(文全体では文頭と文末に強勢)となる語順が好ましいものとして選ばれる。逆の語順は(Here) my brother comes であり、集合強勢により強弱のパターン(文末強勢でない)となるし、文末強勢を無理に適用しても(Here) my brother comes となり、新情報の *my brother* に音韻的な卓立が置かれなくなる。また、(Here) my brother comes として文末強勢に加えて *my brother* にも卓立を与えると強勢の衝突が起きてしまう。(2b)も同様に(“Ooh,”) squeaks Minnie という語順が選ばれる。

代名詞が主語の場合は主語・動詞倒置が起こらない。代名詞は基本的に強勢を受けないからである。

- (10) a. Here he comes. (*Here comes he. / *Here comes he.)
 b. “Ooh, ” she squeaks. (*“Ooh, ” squeaks she. / *“Ooh, ” squeaks she.)

また、この主語・動詞倒置では動詞は単純形でなければならない。

- (11) a. * Here is coming my brother.
 b. * “Ooh, ” is squeaking Minnie.

主語と述部を倒置すると(12d)となり、(11a)の語順は姉妹回転で派生しないと説明できる。

- (12) a. {{my, brother} {is, {coming, here}}} > Preposing: *here*
 b. {here {{{my, brother} {is, {coming, here}}}} > Transfer: *coming*
 c. {here {{{my, brother} {is, {coming, here}}}} (PF: coming)
 d. Here [[is coming here] [my brother]] coming (PF: Here is my brother coming.)

(12d)の語順は、There is a bus coming のような文に現れるものと考えられる。

前置に主語と動詞複合体の倒置が起こる(3)の構文については、非対格動詞あるいは受動態でのみ見られることから、主語が動詞の姉妹として併合されると考える。基本的には次の(13)のように、主語(a man)は集合で、動詞(killed)よりも重いため、(13c)のように文末に来るように外在化される。

- (13) a. {was {{in the garden} {killed, {a man}}}}
 b. {{in the garden} {was {{in the garden} {killed, {a man}}}}
 c. [[In the garden] [was [[in the garden] [killed [a man]]]]] (PF: In the garden was killed a man.)

主語が代名詞の場合は次の(14a)のように倒置が起こらず、動詞が複合体でない場合は(14b)のように倒置が義務的となる。これらの語順も強勢とリズムによって説明ができると思われる。

- (14) a. * In the garden was killed he.
 b. In the garden is an elm tree. (*In the garden an elm tree is.)

5. 結論

以上、主語（助）動詞倒置は、主要部移動によるのではなく、姉妹要素である主語と（補部が転送か移動された）述部 T' が回転して、好ましい強勢リズムに合う語順に外在化される「倒置」であることを論じた。

参考文献

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA: MIT Press.

Tokizaki, Hisao (2018) “Externalization, stress and word order,” *Proceedings of Sophia University Linguistic Society* No.32, 18-34.

時崎久夫(2021)「音韻部門で要素は移動するか」日本英語学会 第39回大会 特別講演. オンライン.